



# 全国私立大学 FD連携フォーラム

News Letter No.7

## CONTENTS

- 
- P.2-4 2014年度前半期活動報告／  
総会・パネルディスカッション開催報告
- 
- P.4 新規加盟校のご紹介  
福岡大学
- 
- P.5-6 大学インタビュー  
立教大学／名城大学／日本大学
- 
- P.7 FD徒然草 Part 6『明るく、楽しく、元気がでるFD ♪』  
中部大学 大学教育研究センター長 坪井 和男
- 
- P.8 入会のご案内／実践的FDプログラムのご案内
-

### 2014年度 幹事会

日時：2014年6月14日(土)12:00～13:00

会場：法政大学 市ヶ谷キャンパス

### 2014年度 総会・パネルディスカッション

日時：2014年6月14日(土)13:00～17:00

会場：法政大学 市ヶ谷キャンパス

## 総会・パネルディスカッション開催報告

### 総会・パネルディスカッションを振り返って

立命館大学 教育開発推進機構

土岐 智賀子

2014年度総会ならびにパネルディスカッションは、6月14日に代表幹事校である法政大学の市ヶ谷キャンパスにて開催されました。

総会では、2014年度活動計画とその概要、年間スケジュール、昨年度の決算ならびに本年度の予算等について報告と審議が行われました。その中で、昨年度から審議されていたJPFFへの加盟条件である大学規模について、現状通り学生数8,000名以上を維持することが決定され、中規模以上の大学が連携をし、その共通課題の克服を目指した連盟というJPFFの独自性を維持しつつ、他の大学・組織等との協力関係を大切にすること、8,000名以上の規模を有する未加盟大学に対しては積極的な勧誘活動の継続をし、「教育の質保証」の輪を広げていくことが確認されました。また、その一方で、連盟外の大学についても、JPFFが開催するシンポジウム・企画等を公開し、教育の向上に貢献していくことが確認されました。

さらに2013年度総会以降に、新規に加盟された関東学院大学(高等教育・開発センター次長松下倫子先生)、東洋大学(FD推進センター長神田雄一先生)、福岡大学(教育開発支援機構副機構長中村信博先生)の3大学からご挨拶をいただきました。ご挨拶の中で、早速オンデマンド講義が活用され、学部ごとの共同視聴の企画も進められているといった嬉しいご報告もありました。

総会に引き続き「アクティブ・ラーニングを支援する取り組み：主体的な学びのための授業支援と教育力活用」と題して開催されたパネルディスカッションでは、関東・関西の大学で取り組まれている事例が報告されました(「パネルディスカッション次第」参照のこと)。

明星大学の太田昌宏先生、御厨まり子氏からは、初年次に必修科目として全学的に展開されている学部学科横断型少人数クラスの事例が報告されました。新入生たちが、グループワークによる体験学習の中で、他者と関わり相互に学

## 総会・パネルディスカッション開催報告

びながら主体的な学習の学びの基礎的な態度(話す、聴く、考える、対話する、気づく)を身につけていくために、教員・上級生(スチューデント・アシスタント)・職員の連携によるサポートが行われている様子が紹介されました。

甲南大学のBrent A. Jones先生は、近年注目を集めている反転授業(flipped class)について、その理論的背景と教育理念、期待される効果を、ユーモアたっぷりにわかりやすく説明してくださいました。



開会挨拶をされる児美川孝一郎 法政大学教育開発支援機構FD推進センター長

立教大学の日向野幹也先生からは、経営学部のビジネス・リーダーシッププログラムについて、2つ主体のリーダーシップの視点-プログラムを企画・実行・推進していく教職員のリーダーシップ(アントレプレナーシップ)の発揮と、主体的・能動的な学びを展開していく学生自身のリーダーシップ-から報告がありました。また、プログラムの説明には受講生で経営学部3年生服部舞さん、元受講生で現在はプログラムの支援をしている株式会社イノベスト代表取締役の松岡洋佑さんが登壇し、その堂々たるプレゼンテーションには会場から大きな拍手が送られました。

最後に登壇された関西大学の三浦真琴先生からは、アクティブ・ラーニングが単なる手法ではなく、学生をどのように主体的な学習者に育てるかという教育理念のもとに行われている営みであるということが説明されたのちに、学生中心主義の発想から取り組まれた実践報告として、初年次教育の授業に既習者(ラーニング・アシスタント)が加わり展開されている、ハイブリッドな学習モデルというべき、教員と学生が共に作り上げ、学生同士が支え合う授業について紹介がありました。

フロアーからの質疑応答の後、閉会となりましたが、参加

者からいただいたアンケートには、「事例報告が大変参考になった」「できることからまねしたい」といった声が多くつづられていました。また、上級生(既習生)の力に対する認識を改めたという声-「これまで配布物・機材設定といった授業補助のみを担当してもらっていましたが、重要性を感じました」「受講生の学びと上級生の成長と学びと教育の質向上が同時に成立するような取組みを実現させたい」なども多く寄せられていました。今後の要望として「学生視点やその力を活かしたFD活動の実質化に向けた事例報告」「アクティブ・ラーニングには教員だけではなく、学生・職員が多く関わっているので、後者の話をもっと聞きたい」といった声がありました。そのほかに「各大学の体系的なFDプログラムとそのポリシーを知りたい」、また、「オープンエデュケーションとブレンド・ラーニング」など新たな動向をふまえた事例紹介の要望がありました。各大学における様々な営みを発表し共有するパネルディスカッションの場は、総会での決定事項である、JPFFの加盟校の共通課題を克服しつつ、連盟内外にも教育の向上を広めていく場として、その期待がますます高まっているという印象を受けました。

場所を移して行われた懇親会は、総会・パネルディスカッションで裏方を務めて下さった法政大学の学生FDスタッフの方々も加わり大変和やかなものになりました。とりわけ、学生FDスタッフの方々による、多数の教職員を前にしたユーモアも交えた堂々としたスピーチは、JPFFの新たな1ページを象徴するものになったと思います。この場をお借りして開催校の法政大学の皆様にもお礼を申し上げます。



パネルディスカッションの質疑応答の様様

※左から司会の川上忠重氏(法政大学)、登壇者の太田昌宏氏、御厨まり子氏(明星大学)、Brent A. Jones氏(甲南大学)、日向野幹也氏(立教大学)、三浦真琴氏(関西大学)

パネルディスカッション次第

◆事例紹介

「明星大学でのアクティブ・ラーニングの取り組み  
～全学初年次教育「自立と体験1」実践報告と授業外学習への展開～」

太田昌宏氏（明星大学 教育センター 准教授）・御厨まり子氏（同センター課長）

「Flipped and Blended Classes for Student Engagement」

Brent A. Jones氏（甲南大学 マネジメント創造学部 教授）

「大学教育アントレプレナーシップ」  
～教職員・学生のリーダーシップと教育～

日向野幹也氏（立教大学 経営学部 教授）

「Future Design for Active Learning（関西大学におけるアクティブ・ラーニングの取り組み）」  
～ハイブリッド型授業で学生をアクティブ・ラーナーに育てる～

三浦真琴氏（関西大学 教育推進部 教授・教育開発支援センター 副センター長）

◆質疑応答

新規加盟校のご紹介

福岡大学

◆全国私立大学FD連携フォーラムへの期待

九州は、関東や関西のように大学が集中している地域と比べれば、他大学の教育改革に関する情報がやや少ない地域です。また、学生数や学部数等の点で本学と同規模の大学もありません。他方で、全国私立大学FD連携フォーラムには、本学と共通の課題を抱えている大学が数多く加盟されているものと考えております。幹事校や会員校の皆さまの大学教育の改善に関する先駆的な取り組みに学び、本学のFDを推進いたします。



教育改善活動フォーラム



新任教育職員研修会

◆学内のFD実践紹介

教育開発支援機構は、主に、以下のFDに関するプログラムを実施しております。

1. 新任教育職員研修会

新任教育職員を対象とした研修会です。教育職員の能力開発の重要性に鑑み、2014年度より内容・機会の充実を図っております。今後は、全国私立大学FD連携フォーラムのオンデマンド講座を有効活用させていただきたいと考えております。

2. 教育改善活動フォーラム

学内の教育改善に関する様々な取り組みを共有するための場です。これまでは、学外の有識者をお招きしての講演会や、学内GPの成果報告会を実施してきました。今後は、本学が独自に抱える教育上の課題や全学的・組織的な検討を必要とする課題に関する実質的な議論の場としたいと考えております。

3. E-ラボ

高等教育改革について学ぶための勉強会です。これまでに扱ったテーマは、「カリキュラムの体系化」や「アクティブラーニングの手法」などです。全学の教育職員・事務職員を対象としています。



## 大学インタビュー

### ▶ 立教大学 教育とサービス

立教大学 総長  
吉岡 知哉



教育はサービスであり、教育機関はサービス産業であるとししばしば言われます。けれどもサービスが顧客の要望に速やかに応えることを目指すのに対して、教師は学生が望まないことを教え、時には学生の固定観念を打ち破らなければなりません。ソクラテスが示したように、教育はむしろ葛藤を本質とするとさえ言えるのです。

また、教育の成果は直ちに目に見える形で現れるわけではありません。30年後であるかもしれませんが、本人に自覚されることすらないかもしれません。サービス産業にとって顧客満足度は自らの存立基盤に関わる重要事項ですが、教育を学生の主観的な満足度で図ることは難しいと考えざるをえません。

教育が知識や技能の伝授という側面から（より直接的には一種の売買として）語られることもあります。しかし教壇に立ったことがある人間は誰でも知っているように、授業は（たとえ大教室の講義であっても）一方向的なものではなく、教師は学生からも多くのことを学びます。それはむしろ、共に考え何かを生み出していく過程であると言うのがふさわしいでしょう。

では教育における顧客ないしは受益者は誰でしょうか。しばしばそれは社会であるとされます。より良い人材を社会に送り出すことが大学の使命であるという表現はごく普通に用いられます。この時教育は一種の生産過程

と看做されることになります。教育機関には、良い人材とは何であるのかについて一定の基準を設けること、その基準に応じて効率的に教育を施すこと、良品と不良品とを選別すること、そして製造過程の不断のチェックが求められます。ここでは、どのような基準が立てうるのか、選別の時点をどこにおくのか、そして社会は「不良品」とされた人材をどう引き受けるのか、ということが課題となるでしょう。

FDをめぐる議論は、教育に関するこれら様々な言説と不可分に展開されてきました。教育においてFDが重要であるという共通理解は、教育についての諸言説との緊張関係の中で広まっていったのです。

しかしFDをめぐる議論において最も重要なことは、それが大学教育の現場に光を当てたことに他なりません。ファカルティ・ディベロップメントというこねない外来語を通じて、私たちは授業について語り、大学教育のあり方について議論する手がかりを得たのです。

教育はサービスや生産や売買とは異なる独自の人間の営為です。それ故にこそ、FDのための試行錯誤とその共有（とりわけ学生との協働）はそれ自体に教育としての意味があるのだと思います。

### ▶ 名城大学 全国私立大学FD連携フォーラムに期待すること ～大学間連携IRネットワークの構築～

名城大学 学長  
中根 敏晴



名城大学（以下「本学」という）は、2016年に開学90周年を迎え、同年に名古屋市東区に「ナゴヤドーム前キャンパス」を開設すると同時に外国語学部の新設を構想しています。この変革期において、教養教育の再考、学生の自律的学習支援制度の構築、キャリア教育の取り入れ等を行うために、FD・SDは不可欠であると考えます。

本学のFDは、「FD活動を通し、学生及び教職員のモチベーションを最大化する『名城教育力』を、自主・自律の探求精神に基づき持続的に創出する」というミッションを掲げております。そのミッションの下、「学生の主体的な学びを促すための、教育活動の探求・実践および蓄積をめざしたFD環境構築」を旨に、活動を展開しています。

しかしながら、教員の教育力を向上させるFD活動は、義務化された以降もイベント型形式的なものが少なからず見受けられ、教員相互のピアレビューによる評価文化が十分に根付いているとは言い切れません。また、FDの実施体制も十分とは言い難いものがあります。これらの課題を克服するため、全国的に大学間の連携や相互支援を強化することが試みられており、国立大学法人では、地域間のFD連携の動きを活発化させています。中部地区では名古屋大学において、FD・SD教育改善支援拠点が設けられていますが、私学による連合結成の動きは見受けられません。本フォーラムに参

画し、加盟大学の取り組みを学べる意義は非常に大きいと考えています。

今後、本フォーラムには、客観的データに基づいて教育改善を進めるため、大学間連携IRネットワークづくりを進めていただきたいと思います。

本学では、2026年をマイルストーンとする学校法人名城大学の次期基本戦略「MS-26」（Meijo Strategy - 2026）において、「グローバル人材の育成」、「ICTの活用による学修支援」を戦略計画に掲げ、学生の学修・生活状況を把握する仕組みを整備してまいります。本学の教育の質の向上に向けては鋭意努力をしておりますが、地域としての大学の教育力向上の視点も欠かすことはできません。本フォーラムは、東海地区にとどまらず、関東・関西圏の大学が加盟しています。加盟大学の共通基盤として、IRネットワークを通じた学生や卒業生の調査等が実施できれば、新たな教学支援モデルの実現が期待されます。

FDへの取り組みに関しては、大学毎に大きな差があり、本学でも、今後取り組むべき多くの課題があります。この全国私立大学FD連携フォーラムに参加することで、他大学の状況を学び、また意見交換する機会を得るという点で、本フォーラムは本学にとって非常に重要な存在になっています。本フォーラムが、大学間、とりわけ建学の精神に基づく個性豊かな教育を実施している私学の協働につながることを期待しています。

▶ 日本大学

学生参画型FDの展開と教育の質的向上への期待  
チャミット  
 ～「日本大学 学生FD CHAmmit」の開催を通じて～

日本大学  
 学務部教育推進課

◆日本大学における「学生参画型FD」の取り組み

日本大学では、2008年4月に日本大学FD推進センターを設置し、全学的かつ組織的なFD活動を推進しています。本学ではFD活動を展開する上での定義を「自主創造の理念の下に日本大学を取り巻く外的諸要因をも分析して、学問領域単位(学科・専攻等)での教育プログラムを常に見直し、それを実行するため、教員が職員と協働し、学生の参画を得ながら組織的に取り組む諸活動」と定めており、「学生の参画」を明示して、教員・職員・学生が三位一体となった教育の質的向上に向けた取り組みを進めています。

しかしながら、本学における「学生参画型FD」に関する歴史は深くありません。2011年7月に『「日本大学FDガイドブック」の作成に係る意見交換会』を開催し、学生の視点を大切にされたプロダクトを生み出すことをその嚆矢としているものの、組織的に「学生参画型FD」を始める先駆けとなった本学文理学部における取り組みが始まったのも2012年度からであり、特に全学的に「学生参画型FD」の取り組みの動きを“実感”できるようになったのは、2013年度に初めて開催した「日本大学 学生FD CHAmmit」(以下、CHAmmit)であるといえます。

本学では、それ以前に2013年4月からの3か年計画で「学生参画型FD活動の整備・強化」を基本計画(中期計画)として位置付け、検討を始めています。本来であれば、中期計画における検討結果を踏まえて、その後何らかのアクションをとることが自然ですが、本学ではその検討時期と並行するように「CHAmmit」を企画・開催しました。これは、偶発的に同時期に生じたと言うこともできますが、実際には、こうしたイベントを開催することで「学生参画型FD活動の整備・強化」に向けた様々な示唆を得られることを見込んだものであるといえます。

◆「日本大学 学生FD CHAmmit」の開催と今後の期待

2014年2月26日(水)に第1回目となる「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」を本学法学部キャンパスで開催しました。開催の発端は「学生FDサミット」の日本大学版のような位置付けでイメージしていましたが、企画案の検討に当たり、そもそも「FDとは?」「学生FDとは?」ということについて、7万人を超える学生・教員・職員に対し、少しでも多くの方々に認知してもらいつつ、各自が抱える「教育」について見つめ直してもらうことを主な目的として掲げました。また、そのように目的をフォーカスすることで、多くのステークホルダーを有する本学にとって、より有効に「CHAmmit」が機能することを期待しました。

このような目的の下、第1回目の企画内容は、2部構成で開催しました。第1部は「共同企画」とし、本学文理学部卒業生であり岡山大学で学生FDを牽引してこられた天野憲樹氏(現:埼玉大学教授)と、本学で先行して学生FD活動が展開されている文理学部学生FDワーキンググループの学生との共同により、「FD」や「学生参画型FD」に関して、寸劇やクイズ、天野憲樹氏による詳細な解説などにより、参加者が

理解を深めることができるように努めました。その後、「学生企画」として、いわゆる「しゃべり場」を“学部ミーティング”や“オール日大ミーティング(ちゃみっとーく!)”と称して行いました。ここでは、多様な意見を共有することの大切さや各学部等における教育改善に向けた方向性について考えることをねらいとして、文系・理系・医歯薬系・芸術系など様々な学部・学科の学生・教員・職員同士が自由な雰囲気での話し合いを行った後、各学部等で再び集まり、幅広い意見などを共有しました。これにより、多様な考え方や課題などを共有し、それぞれの立場で“気づき”が得られるように促しました。

当日のアンケート結果によると、「学生FD」という言葉を知っている学生の割合が当初19.3%であったのが、結果として89.2%の参加者が「学生FDについて理解できた・概ね理解できた」と回答しました。また、同様に85.5%の参加者がこのイベント自体を「楽しむことができた」と回答しました。

このように、第1回目の「CHAmmit」は、“参加した学生・教員・職員にFDとその必要性、そして、「学生FD」について理解していただく」という目的に鑑みると、概ね成功したといえます。現在は、第2回目の開催(2014年12月21日)に向けて学生を中心に企画内容等を検討しています。

本学のように多数のキャンパス(学部)が分散し、多くの学生・教員・職員を擁する大学にとっては、大学としての方針を明確に示し、組織的に対応していくことが、学生参画型FDの展開に向けて有効であると捉えています。その上で、各学部等において、当該学部等の特性に応じた具体的な取り組みを進めていく必要があるように考えています。

本学の全学的な学生参画型FDは、「CHAmmit」を中心とした啓発活動に重点が置かれており、初歩的・萌芽的な段階にあります。他の大学で既に展開されているような具体的かつ効果的な学生FDの取り組みなども参考にしつつ、中長期的な視点でじっくりと裾野を広げながら、より実効性のある学生参画型FDを展開していくことになるでしょう。併せて、本学のように組織的な「啓発」からのアプローチが、今後、学内外における学生FDの展開にどのような効果をもたらすか、時間をかけて問うていきたいと考えています。

(文責:後藤裕哉)



「学生FDについて紹介した共同企画」



「様々な学部からの参加者が集まり話合った“オール日大ミーティング”」

## 明るく、楽しく、元気がでるFD ♪



中部大学 大学教育研究センター長  
坪井 和男

中部大学大学教育研究センターは、2000年(平成12年)4月、学長直属の組織として、学部および大学院研究科の教育全般に関する調査研究を行い、大学教育等の改革、改善、質的向上に資することを目的に、1993年に設置された「総合企画室」をベースに誕生しました。当時は、学長自ら参加して若手教員と寝食をともにする合宿を実施、夜遅くまで教育について熱く語り合い、現在のFD活動における重要な“学部を超えた教育ネットワークづくり”へと繋がっています。

本学では、多くの実践的なFD活動も企画し、現在までに、教育改革・改善、学生指導、研究活動等に関するFD講演会(37回)、FDフォーラム(18回)、教員キャリアアッププログラム(35回)などを実施するとともに「教育活動顕彰制度—より良い教育を目指して—」なども導入・実施してきました。

特に、2008年度からFD活動の重点目標として『魅力ある授業づくり』を掲げたことをきっかけに、「学生による授業評価(1995年からマークシートを使って全学で実施)」の設問項目も見直し、同様な設問項目で「教員による授業自己評価」も加え、新たにWebを利用して実施(2010年度より携帯利用可)、さらに「授業改善アンケート」「Cumoc(キューモ:Chubu University Mobile Clicker)」システムの提供、授業改善ビデオ撮影支援、授業のオープン化制度、全学公開授業、授業サロンなども実施しています。

これらの取り組みの中でも『授業サロン』は、異なる分野、文理の壁を超えた5人の教員が、お互いに授業見学を行い、授業の考え方、工夫、改善策などについて、情報交換や意見交換をしながら授業改善のヒントを見出すことを目的としたワンキャンパスならではのFD活動です。異分野ならではの見方・考え方など新たな発見もあり、学部を超えたFDネットワークの形成が大いに好評を得ています。関連して、2013年度から『FDカフェ』なる取り組みも始めました。これは、専任教員、非常勤教員、職員に呼びかけ、広い意味での教育活動に関するさまざまなテーマで気軽にコーヒーなど飲みながら話し合う場をつくり、お互いに教職員力の向上をめざ

そうとの取り組みです。例えば「アスペ学生の理解と支援」「FDを楽しむ♪」「板書派?パワポ派?」などのテーマで、教員の立場、職員の立場などからいろいろな発言が出て、これまた多くの新たな発見があり、まさに教職協同(教員と職員とが目的を一にして、ともに心と力を合わせて事をなすこと)の実が得られているのではなかろうかと考えています。

いずれのFD企画も教職員自らの積極的な参加による開かれたFD活動で、熱心な教職員が主体的に活動できる雰囲気は心強い限りです。

また、『魅力ある授業づくり』をさらに推し進め、学生と教職員がともにより良い授業を考えるきっかけづくりとして、2013年度に『魅力ある授業づくり』作品コンクールを実施しました。『魅力ある授業』をテーマに学部生・大学院生、聴講生から予想を超える小論文、俳句、短歌、ポスター、漫画など68作品が集まりました。学生公募審査員も含めた審査の結果、優秀な15作品に中部大学長賞、優秀賞、部門賞、学生審査委員特別賞などが授与されました。一般公募の教職員と学生を含めた55人の審査員が“生の学生の考え”を受け止めた時点で大きな反響があり、受賞作品集の刊行をはじめ、学長と受賞学生の対談など、学生と教職員が『魅力ある授業』について共有する貴重な教育コミュニケーションの場となりました。

さらに、2013年度からは、全ての教員が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FDプログラムへの積極的な参加を奨励するため、種々のFDプログラムへの参加の規定条件を満たした教員に対し、修了証を授与する「中部大学『魅力ある授業づくり』プログラム」も始めています。

大学教育が、少なからず未来の主役たる学生個々人の将来を決定してしまうような影響を及ぼす営みである限り、その理念等を真摯に議論して改革、改善、推進することは言うまでもないことですが、常に教職員が前向きに自らの資質向上を目指すカルチャーを構築するためには、合言葉として「明るく、楽しく、元気がでるFD ♪」がバッチリではなかろうかと思う昨今です。

## 入会のご案内



全国私立大学FD連携フォーラムは、全国の中規模以上(学生数8,000名以上)の私立大学が連携し、全国の高等教育の質の向上を目指し、活動しています。本フォーラムでは、高等教育の質の向上に資するため、加盟校間での情報共有や意見交換を促進しています。

ウェブサイトでは取り組みの概要や、加盟校のFD活動についてご紹介しております。詳しくは下記ページをご覧ください。

URL: <http://www.fd-forum.org/fd-forum/>

入会を希望される場合には、ウェブサイト「入会のご案内」から「入会届」をダウンロードの上、事務局まで郵送でお送り下さい。

※フォーラム運営に係る費用は、会員校の年会費で賄っております。

(年会費:5万円(2014年10月現在))

※入会に関するご質問がございましたら、事務局までお問い合わせください。

## 実践的FDプログラムのご案内

実践的FDプログラムとは、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察することができる知識、技能、態度、特にアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得する研修プログラムです。

本プログラムは、教員の4つのアカデミック・プラクティス(教育、研究、社会貢献、管理運営)に対して、

- ① 教育学をはじめとした系統的な理論のオンデマンド講義
- ② 授業技術やコミュニケーションスキルを育成するワークショップ
- ③ 個々の教員ニーズに応える日常的な教育コンサルテーション

から構成されています。

私立大学には、クラス規模の大きさ、教員の持ちコマ数の多さ、学生の学力と学習意欲の多様性など、多くの困難な教育条件が存在します。たとえば、各大学では、新任教員研修において本プログラムを利用することを通して、大学教員に求められる教育力量と職能を育成し、大学教育の質を保証することが可能となります。

各大学の対象者や実施目的の違いによって、講義(オンデマンド)や講座(ワークショップ)等を選択し、様々なプログラムを作ることが出来ます。

詳しくは、ウェブサイトをご覧ください。

JPF会員校

[http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/fd\\_application.html](http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/fd_application.html)

JPF非会員校

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/fd\\_p/fd\\_program.html](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/fd_p/fd_program.html)



### 利用申込について

利用期間は1年間となります。(5月利用開始、翌年3月末終了)

上記のウェブサイトより「利用申込書」をダウンロードし、事務局へお送り下さい。

利用申込は随時受け付けておりますが、手続きのため、利用いただけるまでに約2週間かかります。

事務局校

立命館大学 教育開発推進機構 (事務局:教育開発支援課)

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL:075-465-8304 FAX:075-465-8318 e-mail:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp